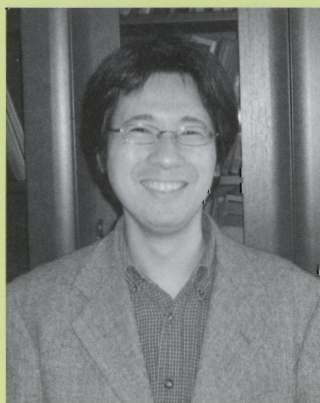


「わからない」を紡ぐこころの旅路

社会福祉学部 鈴木 孝典



Profile

すずきたかのり 1974年神奈川県生まれ。大正大学大学院文学研究科社会福祉学専攻修士課程修了。医療法人丹沢病院に精神科ソーシャルワーカーとして勤務した後、神奈川県立保健福祉大学保健福祉学部助手を経て、2006年より高知女子大学社会福祉学部講師。精神保健福祉士と社会福祉士の国家資格を有する。

●私のリフレッシュ法

2歳半になる息子と本気になって遊ぶこと。子どもと同じ目線で一緒に行動すると、色々な発見があります。最近では、子どもが大好きな『世界の国旗』の色使いやレイアウトの美しさに魅了されています。

【一冊の書との出会い】

「こころの旅路」とは、故神谷美恵子先生が、著書『こころの旅』（日本評論社：1974年）の中で使われた言葉です。神谷先生は、この本の中で人がこの世に生を受け、死に逝くまでの人生の周期（ライフ・サイクル）を「こころの旅路」と捉え、先生の専門領域である精神医学の視点にとどまらず、社会学、哲学など幅広い視座から考察しています。私がこの本に出会ったのは、大学を卒業して間もなくの頃でした。はじめてこの書を読んだとき、私は率直に「わからない」という感想に至りました。神谷先生の文章が取り立てて難しかったという訳ではありません。恐らく、書かれていることにリアリティを覚えることができず、そのことが「わからない」という感覚に変換されたのでしょう。

【これまでの旅路】

話は変わりますが、大学を卒業してから約5年間、身を投じた精神保健福祉の現場で関わった精神障害をもつ人びととその家族は、私の人生を方向付けました。365日同じ背広を洗濯せずに着用する男性、会うたびに人格が異なるご婦人、電話のたびに自死をほのめかすご老人など、こころの病と付き合いながら人生を歩む人びととの対話は、困難や苦痛を感じることもあれば、喜びや癒しを感じることもありました。その関わり合いを通じて、私は人についての色々なことを知りました。それは、人が持つ弱さ、汚さ、残酷さ、儚さ、強さ、美しさ、優しさ、凶太さ等々であり、これらは私自身ももれなく持ち合わせているということです。その上で知り及んだこと、それは関わる他者のことも自分のことも含めて、「わかること」は表層に現れたごく一部のことであり、「人のことはようわからん」ということです。小林一茶の俳句に「鹽（たらい）から鹽にうつるちんぷんかんぷん」と歌ったものがあります。一茶に言わせれば、「人の生き様」は、「旅路の終わり」まで「ようわからん」ということなので

しょう。偉大な俳諧師が「ちんぷんかんぷん」と言うものを、私などわかる訳がありません。

【「わからない」を紡ぐ苦勞と楽しさ】

最近、よく学生から「なぜ大学の教員になったのか？」との質問を受けます。そのたびに困ってしまい、結局「よくわからない」と答えています。しかし、「なぜ大学の教員を続けているのか？」という質問であれば、答えは明確です。それは、「わからない」ことに正直になり、それを探求する苦勞や楽しさを学生たちと共有したいからです。私はここ5年ほど、精神障害をもつ人びとと専門職や社会サービスとの接点に生じるリスクについて研究活動を展開しています。この活動において、精神障害をもつ人びとに対するインタビューや参与観察を続ける中で、彼らの「地域での暮らし」に対する思いやそれを守り続けるための努力を知り得たとき、自分がその人たちのことを全く「知らない」ということを実感しました。この「知らなさ」、「わからなさ」から新たな問いを立て、その答えを考えていく作業は、時間も費用もかなり苦勞の連続です。しかし、当事者の何気ない一言や専門書の片隅などにそれをとらえるヒントを発見し、その先の道筋がぼんやりと見えてくる感覚を知ったとき、「わからない」を紡ぎ真理を探求する意義とその楽しさに気付かされます。

【こころの旅路にて】

神谷先生の書に出会ってから10年が過ぎました。この間、様々な人びとの人生に触れながら、少しずつ自分の「こころの旅路」をとらえることが出来るようになりました。とくに、精神障害をもつ人びととの出会いからはじまった、「わからない」ことを紡ぎ真実を探し、またわからなくなるという歩みは、「ちんぷんかんぷん」になりながらも私の旅路を確実に紡ぎ出しているように思います。しかし、人生の書を「わかる」と言えるようになるまでには、まだまだ精進が必要であるようです。